平成２７年度　第７号

学校だより

平成２７年１０月３０日

横浜市立二谷小学校
校長　　渡邉　文子

読書の秋

学校長　渡邉文子

すっかり日の暮れが早くなり、秋も深まってまいりました。読書の秋です。

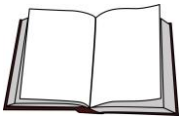
二谷小は平成２５年後期から学校司書が配置され、読書活動の工夫と改善に努めてきました。学校司書の取組や保護者ボランティアの皆様のお力もあり、図書室の環境整備もいちだんと進んでいます。

この２年で図書室に足を運ぶ子が増え、貸し出し冊数も伸びました。また、先日の後期始業式では、代表児童が後期のめあてとして読書冊数をあげていて、子どもたちにとって本がぐっと身近な存在になってきているということを感じます。

国語科の授業では、教科書の教材だけでなく関連した本を並行させて読む「並行読書」に取り組んでいます。最近の例では、２年生がアーノルド・ローベル作「お手紙」を同じシリーズの本と一緒に読んで作品の楽しさを存分に味わったり、３年生が教科書の「すがたをかえる大豆」をきっかけに食品に関する本を読んで調べ学習をしたりという具合に、読書を意識した授業づくりを進めています。教室に図書室や公共図書館の本が並ぶ光景も多くなってきました。そのための本の選定や収集に学校司書の力はますます欠かせないものになっています。

学力世界一と言われるフィンランドの学校や図書館を視察したことがあります。フィンランドでは読書にたいへん力を入れています。ちょうど訪れた小学校では、読書週間のような催しの一環として読書カードが廊下に掲示されていました。読むだけに終わらせず、書くことによってさらに力を付けようとしていることが分かりました。小学校の図書室はそれほど広くはありませんでしたが、近くにある公共図書館を授業でも利用するので困ることはないようでした。「読書は学力」という考えが徹底しています。

「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの」と言われます。（文部科学省子どもの読書活動推進ＨＰより）文字に触れることを億劫がらない習慣をつけるのみならず、豊かな知識を得たり、ものの見方や考え方を広げたり深めたり、想像力や感受性を豊かにしたり…。読書のよさはたくさんあります。子どもが本好きになるには、そこに家族や教師、友達などの子どもと本を繋ぐ人の存在が不可欠です。秋の夜長、本を手に取り、読み聞かせをしたり家族で読書をしたりしてみてはいかがでしょうか。



〈こんな本いかがですか。〉

・「ちょっとだけ」（小さい弟妹が誕生したときに親として読むとハッとさせられます。）

・「ベーグル・チームの作戦」（思春期を迎えた男の子のお母さんにおすすめです。）